

短編小説館

ダーチャの春

長瀬正枝

イワーノフは、ふと目を覚ました。外はもう明るくなっていて。寝返りを打つてみて、体から痛みが消えていることに気がつく。確かに春がダーチャの中にまで訪れていた。

神経痛に悩まされていた冬の間中、ずっと同じ夢を見ていたような気がする。それは、第二次世界大戦で中国に進軍し、戦勝国ソ連の兵士として各都市を歩きまわった時の夢だ。

当時十七才だった彼は、先輩の兵士たちのように自分が欲しい物を無料で調達することなどとても出来なかった。

しかし、窓もない荷物を運ぶ貨物列車に押し込められ、家畜並みに運搬されては武装解除に当たっているうちに心が荒れた。

「先輩たちがやっていることは、略奪じゃないか。だから、監獄から満州に直行した囚人部隊だと言われるんだ」

と批判をしながら、いよいよ最後の任務を終えて朝鮮に移動する時、幼い時から貧しくて玩具なんて買ってもらえなかった妹に、何か一つ持ち帰りたいと思った。そこで、彼は若い三人でグループを組み日本人住宅に入る。家人は恐れおのき金品や貴金属を差し出した。

イワーノフはそれには目もくれず、女の子のそばに置いてあった日本人形に手を伸ばした。

それと同時に、幼女が人形に飛びつく。だが、一瞬、彼の方が早かった。抱き上げた人形を指さし女の子が泣き出した。イワーノフがなだめるつもりで頭をなでた時、小さな歯が彼の指に噛み付いた。

「この人形だけ土産にもらいたいから、泣かないでくれ。おもちゃは他にもあるじゃないか」

心の中でつぶやきながら、立ち去ったのだった。

苦い思いと共に日本人形を持ってウクライナに帰国してみると、妹は、母の親戚にもらわれていった後だった。

イワーノフは、それから五十年、農機具小屋のダーチャの片隅に布にくるんでしまい込んだ。年に一度、人形を見ると、大声で泣きながら噛み付いた女の子の顔が重なり、胸がきゅんとする。何年経ってもシミひとつない顔は、悲しいほど美しく

「あたしを日本に帰して」

と語りかけているような気がしてならない。

冬の間、体の痛さに耐えながら考えていたことを遂に行動に移すことにした。半世紀以上独身で苦しい生活と孤独な彼を見守ってきた日本人形を横抱きにして駅前通りに向かう。と、日本人と通訳らしい男とすれ違う。思いきって彼等呼び止めると

「これ、日本に持って帰って持主の女の子に返してほしい」

人形を差し出す。二人は彼の長年の思いまで聞いてくれた。胸のつかえを吐き出し、老いの身を杖に託しているイワーノフに日本人が一枚の紙幣を差し出す。通訳がウクライナの通貨に換金彼に握らせたが、それは、何年手にしたことがないほどの高額だった。

イワーノフは不思議な気がした。戦争に破れた日本人が古い人形ひとつに大金を払い、戦争に勝ったはずの自分達は貧困から逃れることはできなかった。「戦争とは何なんだ!」と、彼は改めて思った。

(「裸形」同人)